

スポーツ少年団指導者の指導観の形成過程に関する研究

—M-GTA を用いた質的アプローチ—

藤村 壮（スポーツ学研究科 競技スポーツ系 コーチング分野）

主査 渋谷俊浩（指導教員） 副査 新井博，豊田則成

A Study on Formation Process of Coaching View of Junior Sports Clubs Coach

- Qualitative approach using M-GTA -

Soh Fujimura

キーワード：スポーツ少年団指導者，指導観の形成，質的研究

Keyword : Junior Sports Clubs Coach, Formation of Coaching View, Qualitative Research

【緒言】

本研究の関心事は、**スポーツ少年団指導者は、どのようにして指導観を形成していくのか**を質的に検討する。

したがって、本研究は「**どのようにしてスポーツ少年団指導者は指導観を形成していくのか**」というリサーチ・クエスチョン（以下：RQ）を設定し、質的にアプローチし、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とする。

【方法】

- ① 調査対象：全国大会出場経験のあるスポーツ少年団男性指導者 10 名。平均年齢 51.3 歳、平均指導歴 22.6 年。
- ② 調査方法：50～60 分の 1 対 1 形式の半構造化インタビューを行った。
- ③ 調査内容：調査の趣旨を説明し、承諾を得た後、会話内容を IC レコーダーに収録し、逐語を起しインタビュー資料とした。
- ④ 分析手順：質的研究法の代表的手法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。本研究は、スポーツ少年団指導者の指導観の形成過程を明らかにするため、スポーツ少年団指導者と子ども、保護者といった 2 つの視点をもって分析を行い、概念図を作成した。また、分析を行うにあたり、質的分析法を用いて研究を実践している教員や、大学院生にスーパーバイズを受け、理論の精緻化を図った。

【結果と考察】

分析の結果から「**どのようにしてスポーツ少年団指導者は指導観を形成していくのか**」という RQ に対しスポーツ少年団指導者は「**①自身の経験だけを頼りに指導をすることで問題に直面する。その②問題に直面し指導がうまくいかなくなることで、内省の機会を得ており、③保護者とうまく付き合っていくからこそ、自身の世界を広げることができる。そして、④指導者としての深みが増すことで、信念を固めながら視野を広げるといったように、⑤スポーツ少年団指導者は、子どもや保護者との関わりを通して指導の幅を広げていく**」というプロセスで指導観を形成していくという仮説的知見を導き出した。

【総括】

上記の考察から、子どもや保護者との関わりに悩みを抱えるスポーツ少年団指導者は、「**子どものみならず保護者との関わりの中で、自身の指導観を成熟させていく**」ことを導き出した。

以下の 4 点を現場への提言とする。

- ① 直面する問題に向き合い悩みながら試行錯誤することが大切である。
- ② 指導者としての幅を広げるためには保護者との関わりが必要不可欠である。
- ③ 信念を固めながらも指導を変化させることを受け入れることが大切である。
- ④ 積極的に子どもや保護者と関わり互いの理解を深めることが大切である。

